



名古屋ハリストス正教会

# なごや「聖歌」だより3月号2013

## 今月の予定

**聖歌練習** 半田 都合によりお休み

名古屋3月10日代式後 ワシリイ聖体礼儀 練習。

## 名古屋指揮当番

3日マリア松島 17日ピーメン松島 24日エレナ広石

## 伝統って何？

\* 正教礼拝の伝統を考える



### 復活祭と日曜日 1

正教徒は復活祭のために一年を過ごしていると言っても過言ではないでしょう。子どもから大人まで、「復活祭」を思うと心がわくわくしてきます。復活祭は「祝いの祝い」「祭の祭」と呼ばれ、奉神礼の内容も、そこに至る準備も、降誕祭などのほかの十二大祭とは別格の扱いです。その準備は2ヶ月に及び、祝いは50日続きます。復活の祝いは小復活祭である主日（日曜日）の聖体礼儀を中心とした一週間の生活サイクルとして繰り返され、信徒の胸に刻みつけられてゆきます。

復活祭は初代教会のかなり早い時代から全地の教会で祝われてきた最も古い祭日です。初代キリスト教徒はユダヤ教最大の祭「過越」を継承し、旧い過越は、イイススの死と復活によって、死から生命へ、罪の奴隷から神の子としての自由への過越へと意味が変えられました。パウエルは「ハリストスが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです……純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。（Iコリ5:7）」と語ります。

2世紀には復活祭の日取りをいつにするかという論争が起こったことが知られています。小アジアではユダヤ教の過ぎ越しに合わせてニサンの14日に、ローマなどほかの多くの地域ではニサンの14日の後の日曜日に祝われていました。ニケア全地公会議（325）で復活祭は春分後の最初の満月後の日曜日と定められ、日取りの計算は学都アレキサンドリアの主教に委任され復活祭の日取りと大斎（四旬節）の始まりが神現祭（公現祭）に交付されることになりました。

今の聖大土曜日晩課と復活祭徹夜祈（早課、聖体礼儀）はもともと一体の祭で、主の受難と復活のできごとは、土曜日の晩から日曜日の明け方にかけての一つの祭として祝われました。埋葬されたイイススの復活が夜の明けぬうちに起こったという事実に基づいて、また夜から昼への移行は「死」から「いのち」への移行を表すシンボルとして重要視されたため、復活祭の祝祭は今でも文字通りの「徹夜祈」として祝われます。

3世紀ごろには新しい改宗者の洗礼が復活祭の夜に行

われるようになりました。そこにも洗礼の水で主と共に死に、主と共に復活するというシンボリズムがあります。洗礼を希望する者はおよそ3年間の求道期間を経た後、その年の復活祭の日取りが発表される神現祭（1月6/19日）の頃になると主教による審査を受け、「啓蒙者（求道者）chatechumen」として登録されます。復活祭までの数週間は、洗礼への最終準備期間となり、齋、悪魔払い、主教直々の講話がありました。エルサレムのキリル、金口イオアンなど多くの聖師父による洗礼講話が残っています。内容は旧約の預言がキリストによって成就したことの解き明かしが中心で、またモラル教育も行われました。、洗礼教育には、すでに洗礼を受けた信徒も参加でき、後の「大斎（四旬節）」へと発展します。今でも大斎期間の平日の晩課では「創世記」と「箴言」、六時課では「イザヤ書」が、受難週になると「出エジプト」「ヨナ」「エゼキエル書」が読まれ、かつての洗礼教育の様子を伝えています。受難週が近づくと『信経（信仰簡条）』、さらに間際になって『天主経（主の祈り）』が授けられました。信経も天主経も信徒だけに明かされた秘密の祈りだったので、すべて口移しで教えられ、書き取ることは許されませんでした。

齋（fasting）とは祭の準備として断食（全く食べないか、水と少量の食物のみを摂る）すること、または特定の食物を避けることです。西方では「謝肉祭（カーニヴァル）」は祝ってもその後の齋はあまり行われませんが、正教会のまじめな信徒は今でも7週間にわたって玉子、乳製品を避け、8週間肉類を食べません。また、大斎の最初の週、受難週、特に聖大金曜日は健康な者は終日断食するように勧められます。多くの修道院では、復活祭の7週前の日曜日、赦罪の晩課のあとの食事が終わると「よき齋を」と挨拶し、大斎に入ります。月曜日、火曜日は断食、水曜日の夕方、晩課に引き続いて行われる「先備聖体礼儀」で聖体を受け、その後始めて簡素な食事が出ます。齋の規程は決して強制的な規則ではなく、健康と状況に応じて、霊的師父の指導と本人の自由意志に基づいて行うように定められます。それも古くからの伝統です。

ロシア語で祈祷文に音楽をつけることを「翻訳ペレヴォード」といいます。ただの音楽付けではなく、奉神礼で用いられる聖歌という言語に翻訳します。セルゲイ神父は長年「英語」の聖歌に携わってきた方です。そのエッセイから「翻訳」の妙技を学びます。

## 2. 適切に翻訳された聖歌は、それ自体に注目を集めません。

歌に注目が集まるのは下手な証拠です。下手な歌とは、音楽や声の間違っているとき、稚拙な作曲や編曲、歌がふさわしくなかったとき（時、場所、聖歌隊の実力、教会の状況、歌われる目的などに合っていないとき）、「ことば」と音楽がアンバランスなとき、自分たちの力量に合わない非現実的な奮闘をするとき、音楽が全く馴染みがないか、ありすぎ

るときにおこります。

音楽が「翻訳しすぎ」で、一見「上手すぎる」のもよくありません。音楽と文に正しく与えられたものを「改造」してしまうとか、あるいはレーゲントが歌に自分の色を加えてしまったのです。注意深い心がないと「やりすぎ」が起こります。私たちの心に潜む「目立ちたがり屋」が自分色をつけさせるのです。経験と練習によって、誇張も、やりすぎも、不足も奉神礼の音楽としてふさわしくないことがわかるようになります。

## 参考資料 聖歌の工夫の例、正教会の伝統から考える 会衆唱 1

日本では明治以来「みんなで歌う」聖歌は一般的ですが、ロシアやギリシアでは「聖歌隊」や特別に選ばれた「聖歌者」が歌うことが多いようです。しかし実は「みんなで歌う」聖歌は正教会の古い伝統なのです。

正教礼拝の発展の歴史を見ると、使徒たちの時代には集まった人々が、聖神<sup>o</sup>に照らされて口々に賛美の歌を歌っていました。ビザンティン時代になると、キリスト教人口が激増したので、多くの人が礼拝に参加できるよう工夫がされました。輔祭の祈願に答える連祷の「主憐れめよ」もその一つです。祭日アンティフォンに見られる「救世主や、生神女の祈祷によって我等を救い給え」というリフレインは、聖歌隊がバックアップして会衆全員で歌い、ソロ歌手が聖詠を挟み込んで歌いました。その形を復活する試みです。「聖枝祭」を例に挙げます。



救世主や 生神女の祈祷によって、我等を救いたまえ

(ソロ) 我喜ぶ、主の我が声、我が祈りを聴きしに因る。♪会衆:救世主や、生神女の祈祷に因りて我等を救ひ給へ。

(ソロ) 彼はその耳を我に傾けたり、故に我在世の日に彼を呼ばん。♪会衆:救世主や、生神女の…

(ソロ) 死の病は我をかこみ、地獄の苦しみは我に臨み、♪会衆:救世主や、生神女の…

(ソロ) 我辛苦艱難に遭へり、そのとき我主の名を呼べり。♪会衆:救世主や、生神女の…

(ソロ) 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。♪会衆:救世主や、生神女の…

ソロの部分は、まっすぐ読むこともできますが、「救世主や～」と同じメロディで歌うとさらに生き生きした感じになります。第2アンティフォンも同様です。「神の子よ」の前に付くことばが祭日によって異なります。ソロの「句」は『三歌斎経』や『使徒経』の巻末にポロキメンとともに書かれています。

ここで紹介したメロディは、ロシアでよく歌われている簡単なメロディです。掛け合いにすると立体感が出ます。「神の国への行進」それがアンティフォンの醍醐味です。



わかき ロバに 乗り給いし かみの子よ 我等 爾に  
アイルイヤを 歌うものを 救いたまえ

第3アンティフォンはリフレインがトロバリになり、聖詠と交互に歌います。『三歌斎経』にも歌い方が書かれています。

## ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料